

女性の主体性に関する一考察

— 「ホストクラブ」という場から

志 田 雅 美

はじめに

本稿は、女性が性的主体として振る舞うホストクラブという場では何が売買されているのかという問いを考察する事を目的としている。近年、女性の社会進出による地位向上や経済基盤の獲得によって、女性の性に対する意識が変容している。2011年に実施された「第7回青少年の性行動全国調査¹⁾」では、「高校生の男女を比較すると、女子の方が性行動が活発である」ということが判明し、その理由として「草食系男子」の増加が一因ではないかと指摘された。そのような男性の性に対する積極性の低下は、これまで性的に客体であった女性が性的に主体となる機会が増加する可能性を高めているのではないだろうか。これは、(当然のことだが)言い換えると、これまで性的に主体であった男性が性的に客体となる可能性が高まっているということだ。ここで、性的に主体／客体であることを定義したい。ジェンダー論や女性学を中心に議論されてきた「性の商品化」とは「性にまつわる行為、情報が商品という形で流通すること」(瀬地山 2001: 108)であるという定義から、そのような「商品」を評価し価値を付与する側を「主体」、反対に「商品」として評価される側を「客体」と本稿では定義付ける。

そのような意味において、現代日本において女性が性的に主体となることに関する研究が進められている²⁾。千葉雅也(2014)は「00年代(ゼロ年代)」に「イケメン」という語彙が出現・増加し、「日本のあらゆる男性が——「イケてる」場合ばかりでなく——、近現代においてかつてなく大規模に、他者(まずもって女性)からの〈眼差しの客体〉とされ」(千葉 2014: 8)たと述べている。このような変化は、男性側の意識の変容を促している。例えば、“恋愛工学³⁾”という語を提唱した藤沢数希の著書『僕は愛を証明しようと思う』(2015)でその意識が明文化されている。著書は、男性が女性をナンパするためのノウハウをまとめたものである。女性に話しかけたり、会話を弾ませたりするときに、繰り返し使う台詞や一連のコミュニケーションを「ルーティーン」と呼ぶなど、どうすれば女性をオトせるのかという手順が一般化され、そのステップごとに説明されている。『僕は愛を証明しようと思う』の登場人物である恋愛工学の師・永沢さんは、恋愛工学を教える中で、以下のように述べている。

売り物なのは俺たちのほうだ。俺たちがショールームに並んでいる商品なんだよ。俺たちは、自分という商品を必死に売ろうとしている。女は、ショールームを眺めて、一番自分の欲望

を叶えてくれそうな男を選ぶ。俺たちのような恋多きプレイヤーは、じつのところ、そうやって気まぐれな女に、選んでもらうことを待つ他ないんだよ。(藤沢 2015: 119)

この文章からも主体としての女性の欲望への関心が生まれていることが分かる。しかし、女性の欲望の具体的な中身に関しては、未だ明確に語られることが少ない。なぜなら、これまでの性規範において「女には性欲がない」あるいは「女の性欲は受動的で男性に依存する」という形でだけ位置付けられてきたからである⁴⁾。そのような状況を、テレビ番組を分析した湯山玲子(2015)は「欲望を女が口に出すと大変に生臭いものになってしまうきらいがある」(湯山 2015: 60)り、中年男性司会者によって仕切られるテレビ番組内でタブーとなっていたと述べる。以上のような主張を踏まえると、女性が“男性のように”性的なことについて語ることは社会的に忌避されていたと言えるだろう。

上記のような社会的状況において、女性の欲望を「叶える」場として存在し続けてきたホストクラブについて考察することで、主体としての女性の欲望について考察できると考える。

ホストクラブの基本情報

ホストクラブは、2015年6月改正の風俗営業法において、新1号営業区分に指定されており、客を接待して飲食する営業を主としている⁵⁾。同区分には、女性が男性に接待をする場であるキャバクラやクラブが属している。その発祥について、McLelland (2005)は1960年代前半に男女両方に接客を行う「gay boys」という“ホストクラブ”が存在したと指摘するが、女性専用のホストクラブは1970年から登場したと言われている(Takeyama 2005: 200)。地下経済を専門に分析している門倉貴史(2006)の調査によると、「ホストクラブの求人情報誌やウェブ上の情報サイトなどに基づいて2005年における店舗数を推計したところ、都心部を中心に全国で980店舗が営業して」おり、「全店舗数の39.1%は東京、神奈川、埼玉、愛知、大阪、北海道の6都道府県に集中する」。

加えて、「あるホストクラブ情報サイトが行ったアンケート調査(有効回答数は154)によれば、ホストクラブの客層の45.5%はホステス、27.3%が風俗産業で働く女性となっており、有閑マダムに入るとみられる主婦の構成比は2.0%」であり、「1回に客が払う金額は1~2万円が最も多く全回答者の37.0%。2~3万円未満が22.1%、3~5万円未満が16.2%、5万円以上が9.7%となっている」ことも調査で明らかにされている。ただ、門倉の調査は2005年時点のものであり、景気の変動などによって、ホスト業界も変化しているだろう。2016年9月30日時点では、大手ホストクラブ情報サイト「ホスホス⁶⁾」の掲載店舗770店、掲載人数12,959名であった。ホスホスに掲載されていない店舗があることを踏まえると、2016年において約800店舗程のホストクラブが営業を行っていることは容易に想像できる。

最後に、ホストクラブは「女性が男性を買う」ときの数少ない選択肢のうちの一つであるとも

言える⁷⁾。それゆえに、門倉(2006)は「(ホストクラブの)2005年の市場規模を推計したところ、約8,584.8億円」にのぼり、それは「ファッションヘルス・イメージクラブの市場規模(2004年で合法・非合法合わせて6655億円)を大きく上回り、ソープランド業界の市場規模(2004年で合法・非合法合わせて9,803.5億円)に次ぐ大きさ」であると述べ、風俗産業の主要ビジネス形態であることを述べた。以上のことから、風俗産業の中では大きなシェアを持つホストクラブを考察する意義はあると考える。

先行研究と問題関心

以下で、ホストクラブに関する先行研究を上げる。ホストクラブに直接言及した研究は数少ないが、ここでは二つの論文を上げる。まず、ホストクラブ従業員として参与観察を行った木島由晶(2009:137-168)「男らしさの装着——ホストクラブにおけるジェンダー・ディスプレイ」だ。筆者自身がホストクラブの従業員として現場に入りそこで見聞きした内容から、ゴフマンのドラマトゥルギーや演技論を用いて、ホストクラブ内部でのジェンダーロールを詳細に記述している。木島(2009)は、ホスト内部のジェンダー関係を「旧来的な「強い男」と「弱い女」の役割(role)が、転倒して遂行される。つまりそこでは、女性が金で男性を「買う」のであり、ホストの支配権や決定権は客の側にある」と述べる。

また、「ホストと客は「遊び」のフレームで構成されており、正直と不実、誠実とシニカルといった真偽の区別はあらかじめ壊れている。ホストクラブは「うそ」を楽しむ場所である。自分の望む〈男〉以上に、相手の望む〈男〉を演じようとする」と述べる。木嶋(2009)は、ホストというキャラクターが「遊び」の場にそぐうように作られた着脱可能なものであると主張し、旧来の一枚岩のような男性的なアイデンティティに変わる新たな性的表象のあり方であると結論づけている。木嶋(2009)は、客である女性に対して直接的な言及はしていないものの、「恋人営業」「友達営業」「オラオラ営業」「枕営業」という営業法の分類や、内部の状況など参与観察によって、ホストクラブ内部の概観が記述した。

もう一つは、飯野智子(2010:59-76)『セクシュアリティ表現とジェンダー』である。飯野(2010)は、男性性の商品化の場としてホストクラブに着目し、東京都新宿区歌舞伎町にある2006年に開店した「クラブコンフォルト」の店長と3名の従業員に対してインタビューを実施した。従業員の意識として「第一前提で相手の女の子よりも優位に立つこと、女の子よりも立場が下になってしまうと自分のことを聞いてくれない」とことや「軽くスキンシップをすることが大事。女の子って独占欲が強いので喜んでくれる。女性は「自分だけ」という独占欲が男性に比べて高い」というホストクラブの従業員の意識が、インタビューを通して明らかにされている。また、「ホストクラブは商談の場では使われない。理由は、ホストクラブに通っていることが恥ずかしいと感じてしまうから」というように、ホスト自身が感じている女性の性的抑圧に関しても言及されている。

飯野(2010)の論文では、「自分だけ」という特別感や非日常感を求めて女性は来店していると考えられている。しかし、それはホストクラブでしか実現できないものなのだろうかという疑問が残る。また、ホストは「女性の財力に寄りかかっている存在」(難波 2013: 129)であるため、インタビューという形式をとっていたとしても、現役のホストクラブ従業員の「ホンネ」と「タテマエ」については考慮しなければいけないだろう。

以上の二つの論文は、そのような木嶋は参与観察、飯野はインタビューという手法を用いて、ホストクラブ内部の記述を試みている。一方で、ホストクラブを分析する上で主要なアクターである客としての女性については記述が薄く、「理想の男性性」に金銭的対価を支払う意味や、ホストクラブに行くことによって得られる「特別感」の中身については記述されていない。

ここで、ホストクラブに関連するものに限定するのではなく、より大きな枠組みであるヘテロセクシュアリティ間の売春問題の先行研究に対する私の問題意識を述べたい。上記の枠組みにおいては、「男が買う側で女が売る側」という不文律の前提を採用しているものが多い。しかし、そうした構図の固定化は「特定の性規範を暗黙のうちに前提してしま」い、「逆に女性をそうした特定の性のあり方にはめ込む危険性」(瀬地山 2001: 119)があるということが指摘されている。例えば、萩上チキ(2012)『彼女たちの売春^{ワリキリ} 社会からの斥力、出会い系の引力』では、出会い喫茶などのグレーゾーンの風俗業で働く女性たちに対してインタビューを行っている。その中のあるケースでは以下のように記述されていた。「数ヶ月前、出会い喫茶の店員に連れて行かれたホストクラブで、「まい」は一人のホストと知り合い、交際を始めた。その彼氏から「体を壊したのでホストをやめなくてはならないが、返さなくてはならないカケ(売掛の略。代金を後で支払うこと)がまだ数十万あってやめるにやめられない」と言われ、カケのカネを肩代わりすることになった。「倍にして返すって言ったんで」と、そのお金が返ってくるのを今でも待っている。(中略)騙されている可能性については考えたこともないようだ。」(萩上 2012: 26)と記述している。

確かに、売春を行う彼女たちが様々な社会的・経済的困難の中で生きていることは記述しなければならず、かつ現在の「まい」の状態は「ホストに騙され、搾取されている」可能性が高い。しかし、彼女(より広く言えば女性)は常に被搾取的な存在なのだろうか。上記の例で言えば、現時点では異なるかもしれないが、「彼氏」との関係の始まりは、「まい」の“搾取”から始まったのではないか。このように、「性規範を暗黙のうちに前提」することによって、学術界では女性が“被搾取”的存在に固定されることが多かったことは、留意する必要があると考える。形を与えられず、かつ女性側も沈黙していた女性の欲望についての研究は、従来の研究を否定するものではなく、性やジェンダー、セクシュアリティの領域の知見を増やす試みであり、一層の蓄積が求められる。

ホストクラブで発露する女性の欲望 ― 資料分析より

以上の先行研究と問題意識を踏まえて、ホストクラブでは何が売買されているのか、特に女性は何を求めてホストクラブを訪れるのかという問いを本稿では考察する。資料とインタビューからの質的な分析を通じて、考察を深めたい。まず分析対象の資料として、吉田精次（1997）『ホストクラブ依存の症例報告』とホストにハマった女性の体験記である『1億5千万の恋 ホストに恋した4年の日々』（なお、宙出版、2007）とを選定した。

吉田精次（1997）『ホストクラブ依存の症例報告』は、精神科医の目線から女性がホストクラブに依存する過程や要因などが網羅的に記述されている資料である。『1億5千万の恋 ホストに恋した4年の日々』は、インターネット上で掲載されていたブログを書籍化したものである。ホストクラブという刺激的な題材であったこともあり、出版日から4ヶ月後には第4版が増版されるヒット作となった。上記の二つの資料から分析した結果、女性がホストクラブを訪れる要因として、①現状への不満・既存の価値観への反抗、②不安定なアイデンティティ、③理想の女性性の追求の三つが存在すると結論付けた。

まず、吉田精次（1997）『ホストクラブ依存の症例報告』について分析する。吉田（1997）の報告の中で登場する患者は、ホストクラブ依存と診断された30代の主婦だ。当初は、吉田が専門としているアルコール依存症の患者として来院したと報告されている。彼女は、当時自営業の夫と二人の子供を持つ主婦であり、20代の頃からホストクラブにはしばしば通っていたが、「25歳で結婚し専業主婦」となったため、「結婚後しばらくホストクラブに行くのをやめたが、28歳と29歳で出産した年にホストクラブに行き朝帰りした」。「その後の2年間はホストクラブから遠ざかっていたが、31歳の時に熱心に子育てサークルの活動をして、3月に表彰された翌日にホストクラブに行き朝帰りし、夫に咎められた」という。「ホストクラブはいつ行っても受け入れられて自分を持ち上げてくれる場所であった」と述べ、「特定のホストに執着して通うのが止められないという要素はなかった」と吉田（1997）は報告している。

ホストクラブ依存と診断された彼女は、「幸福な家庭を築き、子供にとって優しい母でありたいと願い、PTAの活動に真剣に取り組む一方で、家事と育児だけの生活に物足りなさを感じると、若い男性から称賛の目で見られ褒められ言い寄られ、「オンナとしてハジけたい」という欲求が生じる」のだという。また、彼女の「バイブル」は、後述する『1億5千万の恋 ホストに恋した4年の日々』であり、その本がホストクラブへ強迫的に通ってしまう“欲望”のスイッチのトリガーとなっていたことが報告されている。彼女は、ホストクラブに行くメリットとして、以下の点を挙げる。

気持ちが高揚する／ハジけられる／酒が好きだけ飲める／夜遊びを存分に楽しめる／タイプの男の子と楽しく会話できる／時には彼氏ができる／流行についていける気がする／ホストに褒められるのが最高／誰も知らない自分になれる／もう一人の自分／別の世界にいられ

る／女でいられる

上記のメリットを、①現状への不満・既存の価値観への反抗、②不安定なアイデンティティ、③理想の女性性の追求の三つに分類し、以下の考察を行う。例えば、「ハジけられる」「別の世界にいられる」という点は、①の現状への不満・既存の価値観への反抗を表しているのではないだろうか。彼女は、「PTAの役員をしている自分とホストクラブに行く自分の二面性に自分を偽善者だと思う」と述べており、「息苦しさ」を感じさせる発言をしている。また、「誰も知らない自分になれる」や「もう一人の自分」は②の不安定なアイデンティティと関係が深く、ホストクラブ内部と外部では自己のアイデンティティが同一でないことを示し、ホストクラブ内外の「自己」の乖離について疑惑を抱いていることが分かる。そして、彼女にとって③の理想の女性性の追求ということは、女性としての価値を再確認することであり、そのことは「女でいられる」「ホストに褒められるのが最高」という記述に現れているだろう。「女でいられる」ことがホストクラブに通うメリットだということは、Takeyama (2005) が行ったインタビューでもしばしば見受けられる表現であり、「女」というアイデンティティとホストクラブは深く関連していると言える。

上記の考察を受けて、『1億5千万の恋 ホストに恋した4年の日々』（なお、宙出版、2007）について分析を進めたい。著書は、ホストクラブに「ハマった」著者が、2000年から2006年までブログを通じて自らの気持ちや当時の出来事を記したものであり、その文章を編集し出版したノンフィクションに近い作品⁸⁾である。主な登場人物は二人だ。一人目は、書き手の「なお」だ。「なお」は、学生の時にアルバイトとしてキャバクラ業を経験したことはあるものの、ホストクラブに通い始めたときは商社でOLをしていた。ホストクラブに通い始めた当初はOLだったものの、「翼」と出会って5ヶ月後に風俗嬢として働き始めることが記されている。中高一貫校に通い、大学に進学し、就職氷河期であったが無事に就職し、本人は「どこにでもよくいるような女の子」であったと回想している。二人目は、ホストの「翼」（源氏名）である。「翼」は、歌舞伎町で営業をしているホストクラブの「代表」であり「お店で一番偉い人」だ。「なお」いわく、「気高くて美しくて雄々しくて自信に満ち溢れていて」「世界中の男たちが犬だとしたら、翼は、犬の群れの中で、たった一匹だけ狼」であり、「他の男とは、全然格が違う」という。著書では、「なお」の日記という形式をとっており、1日単位で記述されている。215日分の日記が収録されており、主に「なお」の心情を中心に「語り」が進められていく。日記は、二人の会話のパートと「なお」の独白のパートに分けられる。以下では、特に「なお」の独白のパートを考察し、ホストクラブに通っている間に顕著に見られる精神的告白を、吉田（1997）の報告を分析した結果を用いて、①現状への不満・既存の価値観への反抗という要素②アイデンティティへの不安という要素③理想の女性性の追求という要素があるものに分類した。記事の中に複数の要素が含まれている場合は重複して数えた結果、①現状への不満・既存の価値観への反抗の要素があるものは11記事、②アイデンティティへの不安の要素を含むものは41記事、③理想の女性性の追求の要

素を含むものは51記事が確認された。記事の中には、日々の出来事を記したものや、家族とのやりとりを記したものも存在しており、断片的な記述も多い。また、実際の書籍ではケータイ小説という形式により一文で改行するという記述方法がとられており、引用の際はその表現方法に準じることとし、括弧内部の数字はページ数を表す。

分析内容

① 現状への不満・既存の価値観への反抗

「なお」の独白の一部からは、肩書きを重視する社会を「低俗」だと感じるものの、それを無視して生きることの出来ない自分への苛立たしさを読み取ることが出来る。例えば、

自分が何者でもなくなることが、こんなにも怖い。

肩書きで相手の人間性をはかるような薄っぺらな世界しか知らないから。

下らないって判ってるのに、拭いきれない低俗な価値観。自分が情けなくなるよ… (168)

わたしにとっては、今までの人生で築きあげてきた社会的地位や信頼なんて、捨ててもよかった。(208)

という記述である。一方で、そのような肩書きの存在を重視する社会において自分が「どこにでもよくいるような女の子」であるとも述べている。社会的価値観を嫌悪しつつも、それによって規定されなければならない自分に対するジレンマが存在していることが、「遊び」のフレームで構成されており、正直と不実、誠実とシニカルといった真偽の区別はあらかじめ壊れている」(木嶋 2009) 場所であるホストクラブへと足を向けさせたと見ることも出来る。

ここで、ホストクラブの社会逸脱的な側面を指摘したい。まず、アウトサイダーの研究を行ったハワード・S・ベッカーは「逸脱とは、他の何にもまして、ある人間の行為に対する他者による反応の結果である」と述べ、逸脱集団の形成過程について「社会集団は、これを犯せば逸脱となるような規則をもうけ、それを特定の人々に適用し、彼らにアウトサイダーのラベルを張ることによって、逸脱を生み出す」という。また、「逸脱研究の本質は、人々が日々の社会生活の中でどのように倫理的意味を構築し再確認しているかの研究」であると述べる⁹⁾。つまり、「逸脱」とは、他者の存在を必要とし、かつ社会やそれによって作られる「倫理的意味」の存在を前提としているということだ。

そのような意味で、ホストクラブは、近代家族の形成を支える性規範からの「逸脱」と男性中心主義社会からの「逸脱」を犯している場として捉えられる。つまり、「性は私的なものであり売買するものではない」という性規範と、「男＝養う・女＝養われる」というジェンダー規範から逸脱しており、そのような逸脱集団の側面はマスメディアによって戯画化されている¹⁰⁾。

また、ベッカーは「逸脱への衝動は誰にでもある」と述べる。しかし、「正常な人間」は、「自己のうちに逸脱衝動を発見したとき、それが自分に及ぼす多方面の影響を想像することによりその衝動を抑制することができる」。ただ、「その人間が成長過程の途中で因襲社会とのもつれた絆を振り切ってしまった場合」、「つまり、評判を気にかけず、因習的な職業についていない人間が、おのれの衝動に対して自由」であるとき、逸脱に走りやすいという。このことを逆説的に考えると、「因習社会との絆を切る」ためには「逸脱」が有効な手立てとなりうるということだ。マスメディアやインターネットの発展により、情報が容易に取得されるようになった現代において、「なお」がホストクラブの逸脱性に無自覚であったとは考えにくく、ホストクラブの逸脱性が「なお」の「因習社会との絆」からの逃避を求める欲求を刺激したと考えることが出来るのではないだろうか。また、門倉（2005）の調査ではホストクラブの客の70%程度が風俗産業で働く女性であることが判明しており、彼女らはホストと同様に「性は私的なものであり売買するものではない」という性規範を犯しているという意識から「同胞」のような感情が芽生える可能性は高いだろう。

② 不安定なアイデンティティ

また、「なお」の独白からはアイデンティティが不安定であり、ある種の思考停止に陥っていると読み取ることが出来る。

ねえ、どうしたらいいか、教えて？翼の言うとおりにするから。あなたに言われたとおりに生きていくから…（114）

何があっても、やっぱり翼くんのために自分が存在していたいと思えた（208）。

という記述が見受けられた。このように、作中では「なお」が自身の人生の選択を「翼」に一任しようとする場面が、幾度か描かれる。このような状態は、「なお」の限定的な問題ではなく、現代人の意識の特徴であるという指摘がある。例えば、アイデンティティが不安定化した個人と社会について考察した大澤真幸（2008）は、現代とは「自己を統合する安定したアイデンティティの基盤が崩れたことで、人々の行為基準や「自分は何者であるか」ということの基準が不明瞭になったリスク社会」であり、「個人は自分が何をすべきなのか、自分をどこに帰属させるべきなのかがわからないままどのように行為するかを選択を強制される」（大澤 2008: 140-142）と述べている。

「アイデンティティ」については、様々な論者によって概念やその変遷について述べてられているが、辞書によると「自己意識の統合性、一貫性、所属性を示す概念であり、“自分がこういう自分である”という感覚や認識のこと¹¹⁾」である。「アイデンティティ」とは、心理学者のエリクソンが確立した概念であるが、社会学において焦点とされるのは、「アイデンティティ」と

いう概念の誕生とそれを取り巻く社会的状況であった。近代社会に入り、自らの出自や役割を一義的に規定する村落共同体が消失し、「私とは何者であるのか」という問いに不断にさらされ続ける近代社会の「再帰性」という特徴をアンソニー・ギデンズが提示した¹²⁾。

日本におけるアイデンティティの変遷を考察した三浦展（2005）は、「明治以来、日本の国民は、近代化、富国強兵という「大きな物語」を共有して」おり、「戦後は、国家主義的なアイデンティティは否定されたが、新たに高度経済成長、中流化という「大きな物語」が登場し、仕事と消費が戦後日本人のアイデンティティになった」が「その両輪が今、どちらも溶解し」としていると主張する。その理由は、バブル崩壊やライフスタイルの多様化によって「大きな物語」が消失し、「理想型」が変質したからであると述べる（三浦 2005: 103-104）。

現代を生きる「なお」が、上記のようなアイデンティティの拡散の危機にさらされていることは容易に想像できる。ただ、アイデンティティの拡散は、現代に生きる人々にとっての共通の課題であり、趣味などを通じて「自分らしさ」を獲得することが目指されることが多い。ここで、アイデンティティの拡散のために、ホストクラブに行く必要があるのかという問いが出てくる。つまり、ホストクラブは、他の趣味と同じ位置にあるものとしてみなすことが出来るのかという問いである。

その問いを受け、ホストクラブという特徴を鑑みると、「ホストクラブへ行く」という行為からは、現代人が抱えるアイデンティティの拡散という問題とともに、女性のアイデンティティの不安定さという問題を見てとることが出来るのではないだろうか。

女性のアイデンティティについて考察した千田有紀（2005）は「女は女であることを問われるだけではない。つねに「どのような女か」ということが問われる」と述べている。それは、「女をめぐるカテゴリーのダブルスタンダードは、基本的には「娼婦」と「主婦」のメタファーをめぐるものである。若くて魅力的な女か、それとも性的対象にすらならない年老いた女か。いいかえれば、性的にアクセス可能な未婚の女なのか、夫に所有されているがゆえに敬意を払うべき主婦なのか」（千田 2005: 279）ということだと続ける、つまり、「どのような女か」という問いは「男性中心主義社会における女である自分の性的価値はどれくらいあるのか」という問いであるということだ。

上記のような女性のアイデンティティの不安定さについては、1970年代のウーマン・リブ運動から主張されている。ウーマン・リブ運動を牽引した田中美津（2001）は、女性は「己を男のイメージの中に売り渡し、その〈どこにもいない女〉と生身身の〈ここにいる女〉との間で切り裂かれるという、己を己で裏切ってきた女の歴史性」が存在し「不安と強迫観念の間で、女は、その不安定な生をより混乱させてきた」（田中 2001: 16）と述べる。上記のような指摘は、「己を男のイメージの中に売り渡し」というように、「客体」として価値付けされる女性の苦悩を主張していると言える。男性社会によって価値付けされる自己に対しての戸惑いと苛立たしさを田中は主張している。

アイデンティティを自ら決定できない女性の苦悩とともに、現代人のアイデンティティの拡散

を抱え込んでいる「なお」の独白は、不安定な自己を持って余している状態を表していると思えることが出来るだろう。特に、どのような選択肢を選ぼうと確実なものを得られないという「リスク社会」における不安を「翼」に押し付けていると見ることも出来る。

③ 理想の女性性の追求

現代人が抱える「リスク社会」における不安を「翼」に押し付けようとする一方で、不安定な女性のアイデンティティに対する処方箋という点にホストクラブの特異点を見出したい。つまり、ホストクラブは、自己について不確かで不安定な状態にある女性が、一時的ではあるが「理想の女性性の追求と実現」を欲望する場となっていると結論付けたい。これまでは、上記で示したように「男性に価値付けされる女性性」に、女性達は一喜一憂し、揺さぶられ、女性が客体として評価される「因習社会」に苦しんできた。一方で、ホストクラブでは、女性が「主体」であるために、そのような価値付けを拒否し、自らが求める「女」を追求できる。つまり、「どのような女か」という問いに対し、自らでその問いに答えられる。前述したように「因習社会との絆を切る」ためには「逸脱」が有効な手立てであり、ホストクラブは男性中心主義社会という「因習社会との絆」を切るための「逸脱」装置として機能しているのではないだろうか。そのような意味で、著書において「なお」は自らが欲望する女性的アイデンティティを、「翼」を通して購入している。

また、作中に出てくる表現から、「なお」が欲望する「女性性」とは、「聖女らしさ」であると考えられる。その理由として、①「なお」と「翼」は肉体関係がないという描かれ方をしていること、②打算的な気持ちを持たずに尽くすことに力点が置かれていることを挙げる。例えば

翼は好きにしているね？好きなモノを買ってね？好きなところへ遊びに行っただろ？

世の中は、おカネで解決できることばかりじゃないけど、せめてわたしにしてあげられるのは、それだけだから……………。

この世の中が、少しでも翼に優しくなりますように… (146)

きっとどんどん欲張りになっていくよね。

そんな自分が嫌だよ。思い上がりたくないんだよ。

何かを犠牲にしたなんて考えたくないの。

その代償として何かを望んでしまいたくないの。

変わらずにこのまま独りでいたいよ。

見返りを求めるようないやらしい人間になりたくないよ。

この想いだけは、どうか汚れないでいて……………

(中略)他に何も要らないから、ただ翼のためだけに存在してたいの。

(中略)この世の中には、おカネで解決できないことも多いけれど、せめて少しでも、世界

が翼に優しくなりますように。

少しでも、この世の中が、翼にとって生きやすくなりますように。(156)

多分、翼くんの笑顔が、わたしの幸せなんだろうね。

もしもわたしが他の男とセックスして稼いだカネで、翼くんが彼女と旅行に行ったとしても——
きっとものすごくせつないけど、幸せだって、言いきれよ？(186)

という記述に現れている。つまり、「なお」は「聖女」としての理想の女性的アイデンティティを実現するために「翼」を“消費”していると見る事が出来る。若者がどのようにして自分らしさを得ようとしているのかという問いに、対して浅野智彦(2006)は、若者の音楽の消費行動とアイデンティティの関連を分析した南田勝也(2006)の考察から、「ある事象へのコミットメントの強さと深さによって「自分らしさ」はある輪郭を獲得しうる」(浅野 2006: 248)と指摘する。つまり、何かにハマればハマるほど「自分とは何者であるか」という問いに対する「答え」が与えられるという。そのような意味において、金銭的負担や店に滞在する時間の長さによって、「なお」は自らが求める女性的アイデンティティの「輪郭」を獲得していく。

一方で、「主体化」とは「他者になる過程に他ならない」と上野(2005: 25)が結論づけるように、そのように主体的に欲望された「なお」のアイデンティティも、男性からの価値付けから自由であるとは言い切れない。「聖女らしさ」というアイデンティティは、男性からの価値付けにおいても「望ましい」ものであるだろう。そこには、「なお」が欲望した女性的アイデンティティは選んだのか、選ばされたのかという無限の問いが存在する。つまり、選んだように見えて「なお」は男性中心主義社会の価値観を内面化しており、「聖女」という男性にとって望ましい女性像を選ばされたのではないかという疑問である。この問いについては、本稿の時点では結論を述べることは出来ないが、女性が欲するアイデンティティを叶える場としてホストクラブが機能していることを指摘したい。

この二人の関係は、「翼」が「俺が店出してやるからお前はもう仕事やめろよ¹³⁾」と発言したことがきっかけで、「なお」が別れを決意し、終わりを迎えることになる。その理由は「怖かっただけ」だという。「翼くんの為に始めたソープなら、せめてひとかけらでも残ってるかもしれない良心の呵責につけ込めたのに。そうして、お金でつなぎ止められなくなった翼くんが本当に去って行く後ろ姿が、それを為す術もなく見送る未来が、怖かった」(340)と述べている。もし、客である「なお」が、ホストである「翼」との愛の成就を求めているならば、自らのために店を出すという「翼」の行動は「責任を取る」という行動の表れであり、二人の“ゴール”である。そのような見方をすると、それを拒否する「なお」の行動は奇怪に映る。しかし、「なお」は「聖女らしさ」や「尽くす女」像を自らのアイデンティティとして消費するためにホストクラブに通っていたのであり、翼とのゴールインを目的として金銭を支払っていたのではないと結論づけるならば、「翼」が「なお」に対して「何かを与える」ということは、上記のアイデンティ

ティの崩壊を予感させ、「なお」が「翼」のもとを去ることを決意するというのは矛盾していない。

また、一般的にメディアではホストクラブでは女性が騙されているという描かれ方をされることが少なくない。しかし、下記の「なお」の記述では女性側はそのような行為には気づいているということがわかる。

社員旅行に行く前に、いつもつけていたブルガリのペンダント、外してそっと首にかけてくれた。

「これ、お守りな？」

翼くんがいなくても、私がちゃんと頑張れるように。(自分がいない間に、ソープ嬢がばっくれないように)

凹みがちな私のことを、翼くんなりに気遣ってくれてる。(他の客にも同じことやってる)
(221)

「(自分がいない間に、ソープ嬢がばっくれないように)」や「(他の客にも同じことやってる)」は、「なお」の「ホンネ」であると言える。このようにホストの「嘘」には気づいているが、それでもホストクラブに訪れるのは、その「嘘」が客にとって重要ではないからだろう。ホストの言動が「やさしさじゃなく営業」であることは、客側は承知しており、そのことは女性の消費意欲を削ぐものではないことが分かる。また、このような水面下の了解が行われていることは、これまで強固に支持されてきた「ホストに騙される可哀想な女性像」が、マスメディアによって固定化されたイメージであり、現場ではそのような言葉遊びを含めて、ホストと客の相互行為が行われていることが分かる。

以上、二つの資料から女性の「欲望」の消費の場としてのホストクラブについて述べたが、一つ留意しなければならないのは、この二つの資料はすべて文字情報であり、どちらもホストクラブという遊びに「行き慣れた」女性の記述である。よって、精神的な側面ばかりを取り上げてしまったが、ホストクラブにおける「ショービズ」的な側面は存在するということは指摘しておかなければならない。つまり、女性はホストの外見や肩書きなどを“欲望”しているという側面だ。大手ホスト情報サイト「ホスホス」には、「写真」「名前」「月間〇千万プレイヤー」「指名本数ナンバーワン」という情報が記載されている(図1)。「ホスホス」は情報サイトという側面から、ホストクラブへの来店動機をもたらすことが期待されているだろう。そして、来店動機につながると思われる「材料」を提供していると考えられる。そうであるとする、ホストクラブ遊びの初期段階では、上に挙げたような「外見」や「肩書き」などを求め、それらを「買っている」と考えられる。

加えて、上記の二つの資料は「語り」の形式をとっている。「ホストクラブ依存の症例報告」の女性は医師やカウンセラーに、「一億五千万の恋 ホストに恋した4年の日々」の「なお」は



図 1

不特定多数に対して、自らのホストクラブ体験を「語っている」。しかし、「語り」というのは、「つねに相互行為的なものであり、他者とのコミュニケーションの中で形をとっていくものであるため」(浅野 2005:78)、そこには社会的価値観や倫理観が入り込んでいる。そのことを踏まえると、前述した「女性は“男性のように”性的なことを語ってはいけない」という社会規範によって、「語り」が形作られている可能性は否定出来ない。Takeyama (2005) は「明確な統計はないものの、80%のホストは客と肉体関係を持っているのではないか」(2005:210)と主張しており、そのような性的な側面や性行為に対する語りが出現しないことに関してはこれからの課題としたい。

男性性の商品化とは — 元ホストクラブ従業員 K さんの語りから

ここまで、客である女性側の資料から、ホストクラブで何を買っているのかという問いについて考察を行ってきた。最後に、ホストは何を売っているのかという問いについて、元ホストである男性へのインタビューを記載する。

インフォーマントは、2014年に3~4ヶ月ほど歌舞伎町のホストクラブで働いた経験を持つ K さんだ。K さんは、24歳のとき、大手百貨店と兼業しながら週に二回程度ホストクラブでアルバイトをしていた。始めたきっかけは、「2年ほど前にやっていたイタリアン飲食店でのアルバイトの際に知り合った先輩の弟が、オーナーとなってホストクラブを開店し、(就業店舗のオーナーの) 兄である先輩に誘われた」からであったと述べる。また、ホストクラブで働くことに対して、「本当は、(ホストの髪型を真似て) 生理的にすごい、こういうのやなの。気持ち悪いと思う。絶対に嫌なの。自分がそうなるの。だから多分やったんだらうなって」と述べるが、一方で「ちょっとだけ(ホストという職業が) ロマンティックだと思ってないとやらないと思う」とも述べ、知らない世界を覗こうとしたことが就業動機であったと続けた。

「就業を経験する前とした後の価値観の変化はあったか」という問いに対しての答えが興味深く、少々長い全文記載する。括弧内部の表現は、筆者が付け加えたものである。

— ホストを経験する前とした後の価値観の変化みたいなものありましたか。

好きになりました。ホストの人が。好きになったんだけど、なんでだろうなあ。えーと、なんか、「情」だと思った。すごく「情」の世界だと思った。すごく相反してるよね、ホストのイメージとね。ホストクラブはルールの一つ目がお金をとるじゃん。他にあんまりないじゃん、ルール。そうなった時に（お金を）とれるのは多分、情だと思ったんだよね。恋愛感情でもそうだし、人間関係とか。で、俺は早い段階でそれは思ったんですよ。俺、最初はラッキーパンチがあるかと思ってたの。俺、結構マニアックな初老の女性とかにモテて、上げお金ゲットできたりするかもしれないと思ってたの。もしかしたら。でも、それは絶対ないって早い段階で思った。（客は）対価を払っているから。関係性の変化（に対して）というか。（客として）ホストに来る人はホスト業界への信頼はあったとしても、だいたい同じテンションでくるわけじゃん。最初は「どんなもんじゃい、どんなのがいるんだろう」って、そこから関係を深めていく、そこが深まっていくことに対してお金を払わせる。これ以上行かないくらいですよみたいな。課金制のアプリみたいな感じだよ。俺はこんだけ出した、俺はこんだけ自分を捨てたのにお前は捨てられないの、それは自分じゃなくてもいい、お金でいい、みたいな。例えばさ、（ホストにも）好き嫌いがある。それで、もし、すごいタイプの女の子が来ちゃったとする。普段の僕ならガチガチだけど、ガチガチにならないように距離をとって、ガチガチにならない距離で好印象を持たれるようにしようかな、あるいは勇気だそうかなって迷える立場にある。でも、ホストはそれができない。それって（自分を）捨てるわけじゃん。えいって。プサイクでも好きなところを必死に探すわけ。手綺麗だね、みたいな。無理に好きになろうとするわけ。それって自分を捨ててる行為じゃない。で、捨てられる人って強いんだよね。だからナンバーワンって強いんだよね。ホストが自分を投げ出して捨てたから、だからお金を下さいみたいな。客は対価としてお金を払う。で、（客は）自分を捨てられない人がそこに居るわけ。だって、できるんだったら恋愛すればいいじゃん。それができないから金を捨てる。

以上のKさんの発言では、ホストクラブにおいては、ホストが「関係性の変化」を「自分を捨てる行為」を行うことで提供し、そのことに対価が発生すると述べる。そのことは、「もし、すごいタイプの女の子が来ちゃったとする。普段の僕ならガチガチだけど、ガチガチにならないように距離をとって、ガチガチにならない距離で好印象を持たれるようにしようかな、あるいは勇気だそうかなって迷える立場にある。でも、ホストはそれができない。それって（自分を）捨てるわけじゃん」という発言に現れている。Kさんが就業したホストクラブでは、新人教育の際に「お客さんの肩を持つてると思って話して」と教育されると言う。そうすることで「そっち（客の方）見なくても（客が何をしているのか）わかるでしょ。少なくともこのクソ女とは思えないよね。それはちょっと面白いなおもって。自己催眠みたいな」と述べた。このように、ホストクラブでは「自己催眠」のように「自分を捨てる」こと、つまり「“自分”を捨て、どのよ

うな相手であっても受容すること」が目指されている。

「ホストに学ぶ会話術」という演習講義を開いた梅崎修（2012）は、有名店でホストとして働いていた頼朝（源氏名）のオーラルヒストリーを記録した。その中で、「頼朝」は「自分の価値観が否定されたり、潰されたり、「本当はこうなのに」って思うことって、すごくストレスがたまると思うんだけど、やっぱり大前提として人が喜ぶことがある」（梅崎 2012: 535）とホストの仕事に際する姿勢を述べた。この語りからも、ホストが「本当はこうなのに」という気持ちを否定して、客に合わせることが指摘されている。以上のことから、ホストは“本来”の自分、すなわち自分のアイデンティティを“捨て”、女性たちはそのことに対して金銭を支払い、自らの理想のアイデンティティの獲得を望んでいると結論づけられる。つまり、ホストクラブという場において、客とホストはアイデンティティを売買していると考えることができる。

結 論

ホストという「記号」がなぜ出来たのかという問いに、鈴木涼美（2014）は「それはワタシたちが望んだからだ」（鈴木 2014: 242）と簡潔に述べる。つまり、ホストという存在は女性が作り出しており、女性の欲望の反射板であるということだ。本稿の分析から、ホストクラブで売買されているのは、女性の主体的に求める女性的アイデンティティと、それを叶えるためのホストのアイデンティティの放棄であると結論づけたが、このことは性的客体としての女性という一辺倒な見方から提示されてきた「ホストに騙され搾取される女性」像には沿わないものだ。しかし、女性が客として何かを“欲望”し、ホストクラブで“搾取”しているという現実を捻じ曲げることは、女性の性的主体性の否定である。女性が主体的に自らの“欲望”を叶えようとしていることに対して、そしてホストがその実現にしているという見方を持つことは、男性／女性の多様で豊かな性の実現の一助になるのではないかと考える。

最後に、ホストクラブは非常に知見のある場であるが、一方で未開拓な場である。ホストクラブという場は学术界で取り扱われることが非常に少ない。ホストからは少し離れるが、「ヤンキー論」の論客の一人である五十嵐（2009）は、「ヤンキー論」は「なかなか現代文化研究の言説と結びつかない」と述べる。その理由として、「オタク系では積極的に言葉を語るオピニオン・リーダーが存在していたのに対し、ヤンキーを代表する論客がいない。文科系の論壇における他者である」（五十嵐 2009: 4）と述べる。確かに、文科系の研究に従事する者たちは、オタク属性に分類される可能性は高く、ヤンキーとは学生時代や思春期に袂を分かった関係であるだろう。そしてヤンキーとホストは、その学術分野における存在のあり方が似ていると私は考える。つまり、ホストもまた「文科系の論壇における他者」であると考えられる。また、非行に走る少年へインタビューをした鈴木大介（2011）は、少年たちが自らを語る言葉を持たないことを指摘している。鈴木は「少女らの多くは、辛い子供時代を自らの中でストーリー化し、語ることができ」、「総じて少女らは“語る言葉”があるように思う」と述べる一方で、「虐げられて育った多くの男

の子は、その過去をめったなことで人に話さない。「親なんかいねー」と笑うことが彼らの強さだ」(鈴木 2011: 226) と言う。以上のように、語る／語られる機会がないホストクラブという場は、現時点において十分な説明が為されているとは言い難い。本論文ではホストクラブの歴史性について言及することが出来ず、現代におけるホストクラブにおける女性の消費行動のみを取り扱ったが、ホストクラブという商業形態は1970年代ごろに確立しており、ホストクラブを取り巻く環境は、時代によって変遷している可能性は高く、本論文ではそのような意味で限定的な言及に止まっている。ゆえに、より一層の研究が求められるだろう。

注

- 1) 調査報告「第7回青少年の性行動全国調査(2011)の概要」より
- 2) 守如子、2010、『女はポルノを読む 女性の性欲とフェミニズム』青弓社など、女性向けポルノやボーイズラブ研究、K-POP研究などを通じて、知見が蓄積されている。
- 3) 藤沢和希(2015)は「恋愛工学」とは、進化生物学の理論や心理学、金融工学のリスクマネジメント技法を恋愛の場面において活用するという「新しい学問」とであると述べる。
- 4) 赤川学、1999、『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房を参考とした
- 5) 2015年6月改正風俗営業法、風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律より抜粋
- 6) 大手ホストクラブ情報サイト「ホスホス」(<http://www.host2.jp/top.html>)
- 7) ホストクラブには店舗型ホストクラブと出張型ホストクラブという分類が存在しているが、門倉(2006)のレポートではその区分については言及されていない。しかし、門倉(2006)は「ホストクラブの求人情報誌やウェブ上の情報サイト」を参考に数字を算出したと述べており、出張型ホストクラブは情報サイトに登録されていないことが多いため、ここでは主に店舗型ホストクラブについての指摘であると考えられる。
- 8) ウェブサイトの日記を編集なく書籍化すると「大辞典ほどの分厚さになる」ため、後半は編集者の判断で書籍には記載されなかった記事がある。
- 9) ハワード・S・ベッカー、2011、『完訳 アウトサイダーズ：ラベリング理論再考』村上直之訳、現代人文社より
- 10) ホストクラブに関する記事は「暴露」や「潜入」というキーワードとともに見受けられることが多く、2014年11月21日発売『FRIDAY』「本誌女性記者、ホストクラブに初潜入」や2011年10月8日発売『週刊実話臨増』「欲望渦巻く歓楽街の恐怖！都内某所 女性客が次々に飛び降りる「ホストビル」の怪」というような「刺激的」なタイトルをつけられることが多い。
- 11) 宮島喬編著、2003、『岩波小辞典 社会学』岩波書店より引用
- 12) アンソニー・ギデンズ(1992=1995)『親密性の変容』松尾精文・松川昭子訳、而立書房より
- 13) この発言の中の「店」がどのようなものなのかは明言されておらず、ただ「なお」のために出店するということが描かれている。

参考文献

浅野智彦、2005、「物語アイデンティティを超えて？」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房、77-102

- 浅野智彦、2006、「若者の現在」浅野智彦編『検証：若者の変貌 失われた10年の後に』勁草書房、233-260
- 五十嵐太郎、2009、『ヤンキー文化論序説』河出書房新社
- 門倉貴史、2006、『ソープランドに匹敵するホストクラブの市場規模』門倉貴史のBRICs 経済研究所 (<http://www004.upp.so-net.ne.jp/kadokura/index.htm>)
- 木島由晶、2009、「男らしさの装着——ホストクラブにおけるジェンダー・ディスプレイ」宮台真司、辻泉、岡井崇之編著『男らしさの快楽：ポピュラー文化からみたその実態』勁草書房、137-168
- 三浦展、2005、「消費の物語の消失と、さまよう「自分らしさ」」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房、103-136
- なお、2007、『1億5千万の恋 ホストに恋した4年の日々』宙出版
- 難波功士、2013、『社会学 ウシジマくん』人文書院
- 萩上チキ、2012、『彼女たちの売春（ワリキリ） 社会からの斥力、出会い系の引力』扶桑社
- 千田有紀、2005、「アイデンティティとポジショナリティ——1990年代の「女」の問題の複合性をめぐって」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房、267-288
- 瀬地山角、2001、「性の商品化とリベラリズム——内容批判から手続きへ——」江原由美子編『フェミニズムの主張5 フェミニズムとリベラリズム』勁草書房、107-126
- 鈴木大介、2011、『家のない少年たち 親に恵まれなかった少年の容赦なきサバイバル』太田出版
- 鈴木涼美、2014、「誰がためにグラスは鳴る」『ユリイカ臨時増刊号 総特集 イケメン・スタディーズ』青土社、46 (10)、238-245
- Takeyama Akiko, 2005, “Commodified romance in a Tokyo host club”, Mark McLelland and Romit Dasgupta, *Genders, Transgenders and Sexualities in Japan, USA and Canada*, Routledge, 200-215
- 田中美津、2001、『いのちの女たちへ：とりみだしウーマン・リブ論』パンドラ
- 千葉雅也、2014、「イケメンであるとされるということ」『ユリイカ臨時増刊号 総特集 イケメン・スタディーズ』青土社、46 (10)、8-9
- 吉田精次、1997、『ホストクラブ依存の症例報告』アディクションと家族 28 (2)、140-146
- 上野千鶴子、2005、「脱アイデンティティの理論」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房、1-42
- 湯山玲子、2015、『男をこじらせる前に 男がリアルにツライ時代の処方箋』角川書店

